包括的な性に関する指導の実践

鹿児島県立鹿児島東高等学校
養護教諭　　益　山　嘉　枝

1　はじめに

本校は生徒数 136 人，普通科６学級の学校である。スクールモットーに「Chance!今この瞬間を！ Challenge!ここで挑戦しよう！ Change!かわることは成長だ！」を掲げ，生徒一人一人の進路目標の達成を目指して，国際交流を通したグローバル化や鹿児島高等特別支援学校等との連携によるインクルーシブ教育にも努めている。

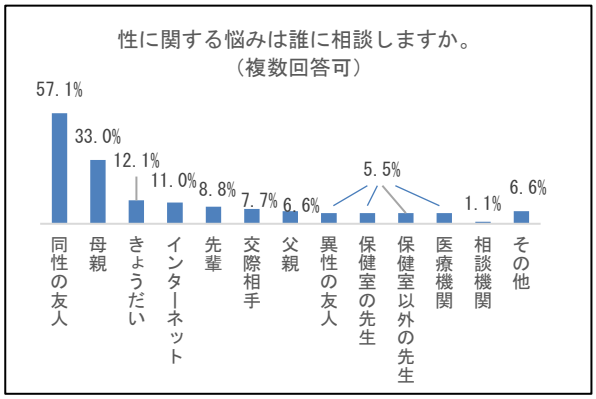
2　本校の実態と主題設定の理由

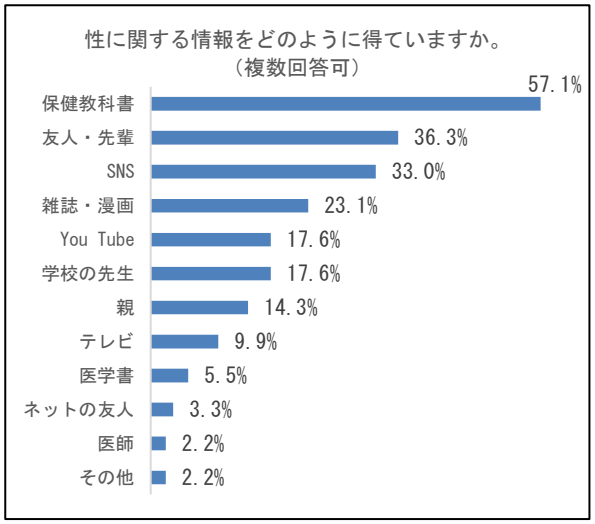
生徒は明るく活発で，親しみやすい雰囲気の生徒が多い。一方で，様々な背景を抱えながら学校生活を送っている者も少なくない。

家庭環境の複雑さを抱えている生徒やコミュニケーション等の支援を要する生徒が一定数いる。また，中学生の時に不登校を経験した生徒が約 31%，特別な支援を受けていた生徒が約 26%在籍しており，個に応じた丁寧な対応が求められている。

令和５年９月に全生徒を対象に行った調査では，性に関する悩みを相談する相手は「同性の友人」「母親」「きょうだい」「インターネット」の順に多く，身近な人に相談していることがわかった。また，性に関する情報を得る方法としては，「保健の教科書」「友人・先輩」「ＳＮＳ」「雑誌・漫画」「You Tube」の順に多く，同世代の友人や雑誌，インターネット上から得る性情報の中には誤った情報もあるため，全教育活動を通じて性に関する指導を推進する必要もあることがわかった。

そこで，本校では生徒の自尊感情やコミュニケーション能力を育成し，生徒が自他の生命や人格を尊重する態度を養うことができるよう，性に関する指導の充実を図る必要があると考え，性に関する指導委員会を中心として，校内及び関係機関と連携しながら取組を行うこととした。





3　具体的な取組

(1) 性について考える週間における保健指導

発達の段階に応じた理解を深めるため，性に関する教育講話の事前指導として，学級担任がＳＨＲの時間を利用して，約 15 分間の保健指導を計３回，各学級で行った。

保健指導実施前には，学校全体の共通理解を図るため，「心理的側面」「身体的側面」「社会的側面」の３つの側面における資料を性に関する指導委員会が準備し，職員研修を行った。

(2) 外部講師による性に関する教育講話

ア　「生と性　健康教育　～性を知ることが大人への第一歩～」

外部講師に泌尿器科の医師を招き，全校生徒を対象に性の情報源や思春期の体，性的同意，性的いやがらせ，ＳＮＳトラブルなどについて，講話を実施した。事前に保

護者への説明を実施するとともに，配慮を必要とする生徒の確認等を行った。講話は男女一緒に実施し，自分自身だけでなく異性についての理解も深めることを目的とした。講話後のアンケートでは，「学校の授業では教えてくれないことを詳しく知ることができた」「これからの人生に役立つ」などの感想が多くあった。

イ　「性の多様性について」

外部講師に助産師を招き，３年生を対象に，グループワークを用いた講話を実施した。カミングアウトやアウティングなどの内容について，各グループに教職員も入り，意見を出し合えるよう工夫した。また，グループ構成を４人１グループの少人数にして，個々の意見を否定せず，互いに尊重し合えるような指導を行った。 講話後のアンケートでは，「卒業前に知ることができて良かった」という感想がほとんどであった。

【グループワークの様子】

(3) 生命（いのち）の安全教育

ＬＨＲの時間を利用して，性に関する指導委員会による生命（いのち）の安全教育を学年毎に実施した。教職員による寸劇を交えた授業やワークシートなどを通して，普段の人間関係を見直すことが性暴力を防ぐために大切であることを学べるよう工夫した。「人との距離感が大切なことを学べた」という感想が多く聞かれた。

【教職員による寸劇の様子】

(4) 心理教室（１・２年生）

１年生はエゴグラムを用いた「自己理解」について，２年生はストレスとの付き合い方について，スクールカウンセラーによる心理教室を実施した。生徒にとって自尊感情やコミュニケーション能力を高める上で不可欠な時間となった。

(5) 性に関する個別の健康相談

性に関する教育講話や生命（いのち）の安全教育の実施後，生徒から「性に関する相談を個別に受けたい」という感想があったことから，希望する生徒を対象に，助産師による個別の健康相談を実施した。２時間のみの実施であったが，保護者や教職員以外の大人にプライベートな相談をできる貴重な機会となった。

４　成果と課題

(1) 成果

ア　外部講師と連携し，発達の段階や実態を踏まえた性に関する指導を実践したことで個別指導の充実も図られ，正しい知識をもつことが今後の人生において役立つことを学ばせることができた。

イ　自らの言動を振り返る機会を設定したことで，自他の人格を尊重するための態度について考えることができた。

ウ　性に関する指導委員会を中心とした学校内外の連携により，教職員一人一人の性に関する指導への意識を高めることができた。

(2) 課題

ア　学ぶ機会を多くつくることで，意識の変化はみられたが，行動の変容まで至らない生徒もみられる。継続的な指導と個別の指導が必要である。

イ　家庭教育の充実を図る取組を通して，保護者との連携・協働を行う必要がある。

５　おわりに

日々変化する情報に対応するため，外部講師から助言や協力をもらいながら，全教職員で生徒たちの心に届く健康教育をこれからも模索していきたい。